演題番号:7
テーマ 3:女性とこどもの健康

ベトナム中南部における施設出産の推移と関連要因

大川純代、天野優希、馬場洋子、駒田謙一、蜂矢正彦

国立国際医療研究センター国際医療協力局

【背景】ベトナムは 1986 年のドイモイ政策以降、経済状況が発展し、母子の健康を含む保健分野も改善してきた。保健施設での出産は母子の死亡を減らす上で重要であるが、ベトナムにおける施設出産率の長期的推移、施設出産の特性を明らかにした研究は少ない。
【方法】本研究は、2019 年 5 月にベトナム中南部で B 型肝炎の血清疫学調査の一部として行った。多段階無作為抽出法により選ばれた 1-39 歳の住民 2072 人を対象に調査票を用いたインタビューを行い、2052 人の有効回答を分析した。まず、出生場所(病院、保健センター、コミューン保健センター、プライベートクリニック、保健施設以外の場所)を出生年別 (1979-1988 年、1989-1998 年、1999-2008 年、2009-2019 年)で比較した。次に、15 歳以下の子ども 580 人を対象に、多変量ロジスティック回帰分析を用いて、保健施設での出生に関連する要因を調べた。さらに、出生場所に関してその場所が選択された理由についてのテキストデータを用いて、保健施設内と施設外の出生に分けて主題分析を行った。
【結果】保健施設で出生した人の割合は 1979-1988 年、1989-1998 年、1999-2008 年、2009-2019 年出生で 56.6%、63.6%、86.2%、89.4%と、近年に近づくほど増加していた。15 歳未満の子どもにおける保健施設外での出生に関連する要因は、出産時の母親の年齢が 16-19 歳、母親の学歴が中学以下、中所得世帯であった。都市部であるカンホア省在住、公務員、企業・工場の労働者の全員が保健施設で出産していた。また、保健施設が出生場所として選ばれた理由は、医療的な必要性(合併症、早産、帝王切開)、医療の安全性・信頼感(安全、専門性、安心、初産)、経済状況(保険によるカバー、貧困)、意向、習慣、安産が抽出された。保健施設外が出生場所として選ばれた理由は、習慣、アクセス困難、出産時の状況(予定外のタイミング、短い分娩時間)、安産・自然分娩が抽出された。
【結論】保健施設での出生は時間の経過とともに増加していた。しかし、母親の年齢、学歴、居住地域、施設へのアクセス、出産時の状況によっては施設外で出産するケースも未だにある。安全な出産を推進するためには、これらの要因に対する対策が必要である。